

中亞史研究資料の探訪

中央亞細亞史の研究者にとつて最も重要な參考書の一つとして、ブレットシュナイダーの中世研究 (Bretschneider, *Mediæval Researches from Eastern Asiatic Sources*) 一部二冊を挙げねばならぬことは、五十年前も今も變りはない。この書は元代を中心にしてその前後に及ぶ蒙古・中央亞細亞の地理や歴史を、支那の記録によつて攷し、それを援けるに回教史家の記述や、十九世紀の後半から急に進展した露西亞の東洋學者の研究の結果を以てしたもので、これが有名なユールのカセイやマルコ・ポーロの旅行記の註釋以外に独自の立場を持つ所以で、この點から斯學の研究者にとつて、重要缺く可らざる入門書と認められて居る。本書は一八八七年トリュブナーの東方叢書的一篇として發行せられたものであるが、その後稀觀書の部類に入り、西洋の書店の目錄にたまにその古本が載つて居ることがあると、少くとも百何十圓かを値したもので、到底當時の貧乏書生の手都合ふ代物ではなかつた。自分が初めて此の書を読んだ明治三十九年頃には、東京に於ては余の知る限り、帝國大學・學習院・高等師範學校及び上野の帝國圖書館の四個所にこれが藏せられて居つた。ところで大學本は某教授の借出し中で、學生は見ることが出來ず、高等師範や學習院のものを見せて貰ふ譯にも行かず、仕方なしに圖書館本を數人して争ふ有様で、寒い雪の朝を、優先權を得ようとして上野の杜に急ぐ途中、下駄の鼻緒を切つて跣足で走つたことなどもあつ